

あけましておめでとうございます。新山門が、新年にふさわしく莊厳な姿を見せてています。昨年は年号が平成から令和へ改元され、新しい日本がスタートしました。

また本年は二回目の東京オリンピックが開催されます。一九六四年に開催された東京オリンピックから五十六年の大行事。新国立競技場も完成し、日本各地でも着々と準備が進み、古いものから新しいものへと姿を変えております。その中で、新しいものを見ては古き頃の姿を思い出し、変化してゆくものを見ては昔を懐かしむ。生死に置き換えてみれば、新しく生まれた家族の顔を見たとき、年回をきつかけとしてご先祖様の生前を思い出すことはよくあることでしょう。

「人は一度死ぬ」などと言われることがあります。一度目はその姿がこの世からなくなる時、二度目はこの世に残された私たちの心の中からご先祖様の事が忘れ去られる時です。私たちの心がけ次第では未來永劫にものになるようを感じるのです。

さて、今年は子年。十二支の始めに来るネズミの年です。新しいサイクルの始まる年ともいえるでしょう。いま一度己の心を振り返り、充実した良い年にしたいのです。

檀信徒の皆さんにおかれましても、心身ともに健やかで幸せに満ちた一年になりますよう御祈念申し上げます。

ごあいさつ

知行院住職 坂本觀泰

探題を山門落慶式でお導師をお勤め頂いた、圓教寺長吏大樹孝啓大僧正様がお勤めになれました。法華大会では、探題大僧正は平安絵巻さながら殿上輿で行列をくんで大講堂に昇堂され習しになつており、住職も正装参列しお見送りをさせて頂きました。

団参で宮島、尾道へ

東京教区団参が行われ、知行院からも住職と四名の皆さまが参加し、岡山・餘慶寺を中心に、山口・広島・岡山をめぐりました。

知行院の所属する第五部は第二部（浅草）と合同で、十月二十九日から十月三一日まで二泊三日、総勢三〇名の参拝旅行となりました。初日は羽田空港から岩国空港（山口県）に向かい、バスで錦帯橋を見学後一路、安芸の宮島へ。残念ながら有名な大鳥居は修復中でしたが、厳島神社をはじめ島内を散策。夜は安芸グランドホテルで一泊。



翌日は原爆ドーム、平和記念資料館を見学し、平和の大切さ、命の大切さを改めて認識。午後は尾道へ。ロープウェイで山頂へ上がり眼下に広がる眺望を堪能しました。晩は「日東第一形勝」と謳われる鞆の浦へ。宿は全室オーシャンビュー。お風呂から眺める瀬戸内海からの日の出は圧巻でした。最終日は備前第一の古刹。約千三百年の歴史を有する餘慶寺に参拝。午後からは約三百年前に岡山藩二代藩主池田綱政が藩主のやすらぎの場として作らせた庭園・後楽園へ。更に足を延ばし、倉敷美観地区を散策し、岡山空港から羽田空港に戻つて参りました。

三日間、晴天に恵まれポカポカ陽気の中、大変有意義な団体参拝旅行になりました。今年は、本山から岡崎・静岡方面をめぐる旅の予定です。是非、多くの方のご参加お待ちしております。

御即位を奉祝し法要を厳修

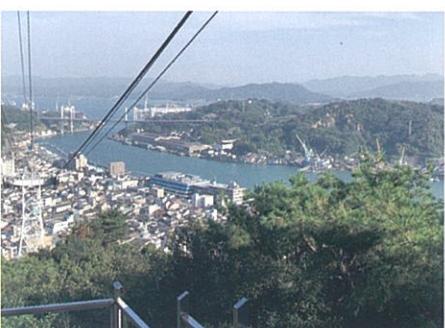
十一月五日、天台宗では天皇陛下のご即位を記念し、延暦寺大講堂において「天皇陛下御即位奉祝法要」を厳修致しました。法要は全国の天台宗寺院の代表十六名が出仕

して執り行われました。堂内には宗内門跡主、宗機顧問、並びに全国から諸大徳が一堂に会し、天皇陛下の玉体安穏と国家安泰の祈願がされました。

法要後には天台雅楽会による雅楽の奉奏と舞祝の喜びに溢れました。

住職は天台雅楽会のメンバーとして筆箋を担当し貴重な法要の末席に名を連ねる榮に浴することができました。

翌日は原爆ドーム、平和記念資料館を見学し、平和の大切さ、命の大切さを改めて認識。午後は尾道へ。ロープウェイから尾道を望む



ロープウェイから尾道を望む

荒了寛住職一周忌法要

十一月十日、天台宗ハワイ別院初代住職荒了寛大僧正の一周年忌法要が、京都妙法院門跡杉谷義純大僧正を導師に、天台仏教青年会・天台雅樂会の出仕により厳修されました。荒大僧正は一九七三年、天台宗ハワイ別院住職、天台宗ハワイ開教総長としてハワイに渡られ、本年一月に遷化されるまで、天台宗海外事業の第一人者として天台宗の教義布教の傍ら、ハワイ一隅会、ハワイ美術院、カバフル日本語学校の設立、ワイキキ海岸の灯籠流し等、様々な日本文化の紹介普及に尽力されました。

知行院本堂前にある賽銭箱は、昭和四九年（一九七四年）にハワイ団参に参加された方々からの寄贈によるもので、知行院と天台別院は開教当时からご縁を頂いておりました。

今回住職は天台雅楽会の一員としての参加でしたが、先代、先々代の思いも一緒に奉奏させて頂くこととなりました。

お寺のこと、仏教のことで、知つてゐるようでよく解りないことを、ご住職にインタビューして、教えていただきます。第六回目は、知施餓鬼や法事でお墓に供える塔婆について解説していただきました。

（聞き手 編集担当 薄井秀夫）

聞き手 施餓鬼や彼岸、年回法要などの時に、塔婆を立てますが、どんな意味があるのでしょ

うか？

住職 塔婆^{とうば}というのは、正式には卒塔婆^{そとうば}と言います。卒塔婆は、インドの古代語であるサンスクリット語の「ストゥーパ」がもとで、仏塔と訳されることもあります。

もともとストゥーパは、お釈迦さまの舎利、つまりご遺骨を納めて、お釈迦さまの徳をしのび、信仰のよりどころにしたのが始まりです。

私たちが、墓地に塔婆をたてるのは、この仏塔をたてることと同じ意味があります。塔を建てると言うことは、仏教では最高の功德を得ることができます。そこで私たちもこれと同じ功德を得られるということなのです。

日本では、仏教が伝来してから、お寺をたてて高僧に寄進する貴族が少なくありませんでした。こうした貴族たちは、なんでお寺を寄進したのでしょうか？もちろん、仏教への深い信仰があつたからこそ、お寺を建てたということはあります。しかしそれ以上に、お寺をたてるることは塔をたてることと同じであり、仏教における最高の功德があると信じていたことが理由

であります。

例えれば、奈良時代に聖武天皇が東大寺を建立したり、桓武天皇が延暦寺を建立したりしたのも同様です。そして功德というのは、この世での幸せであり、同時にあの世での幸せです。特に、死んだ後に浄土に行くことは、当時の人々にとつて切実な願いだつたのです。

聞き手 塔婆をたてることで、お寺を建てたことと同じ功德が得られると言ふことなんですね。

住職 そして塔婆をお墓にたてることで、その功德をあの世のお父さま、お母さま、ご先祖さまに回向することができる、手向けることができるのです。

それはご先祖さまへの報恩感謝の意味もあります。今私たちがここで生きているのは、ご先祖さまのおかげです。そうした方々があの世で安らかでいてほしいと考えるのは、生きている私たちの自然な感情です。

聞き手 それから塔婆は、直線の板ではなく、上方に切り込みが入っていますが、それはどういう意味があるのでしよう？

住職 塔婆の形は、実は五輪塔の形をしていま

住職が東京教区宗務副所長に就任

十月三日、天台宗東京教区臨時教区議会が招集され、任期満了に伴う役員選出の議案が提出、住職が宗務副所長として選任されました。任期は四年。

天台宗東京教区とは東京都に所在する天台宗寺院一五九ヶ寺の宗務を処理し、教区内の諸題に対応する行政機関です。宗務副所長は統括責任者である宗務所長を補佐する役目で、円滑な宗務処理に扶助をすることが主たる任務になります。本年九月まで教務主任として奉職していた事から、林觀照宗務所長に推薦をうけ、一般の教区議会で同意を頂いての就任となりました。

この就任を受けて、坂本觀泰住職は次のように述べています。

「この度の教区人事は、知行院にとつてもとても深いご縁を感じております。新しく宗務所長になられた林師のご祖父様觀雅大僧正と当院先々代觀雄大僧正は、目黒不動・龍泉寺加藤觀澄大僧正の下、兄弟弟子として青年期をすごされました。特にお二人は仲が良く、先々代が知行院に入山後、新规の檀家第一号になるという約束を交わされ、現在もお位牌をお祀りしています。

また、昭和二六年に宗教法人法が施行された際に、責任役員をお引き受け頂き、約二〇年間、知行院の運営に深く関わって頂きました。このような、ご縁と責任の重さを痛感しつつ、日々宗務に邁進しております。」

比叡山に伝わる最高法儀

五年一會で執行される、比叡山延暦寺の古儀を伝える法要「法華大会」が、十月一日から六日間、六夜にわたつて比叡山大講堂で厳修されました。

法華十講、午後から夜半にかけて僧侶の学問を試験する「広学堅義」が執り行われます。法華十講は、六月会と霜月会(両大師の報恩会)を併せて計三十名が、経巻毎に替わる「問者」に対し、その答えを次の探題にならる「已講」

大僧正がお一人で講じられる法要です。本年は京都三千院門跡堀沢祖門大僧正がその重責を六日間にわたり勤仕されました。

また広学堅義は、天台宗の僧侶として幅広く教えを学べているのか、法華經の真理を究めて正当な義を立てることができるかを問われる堅義(試験)で、高座の上に一人登り背後から受

ける、探題。

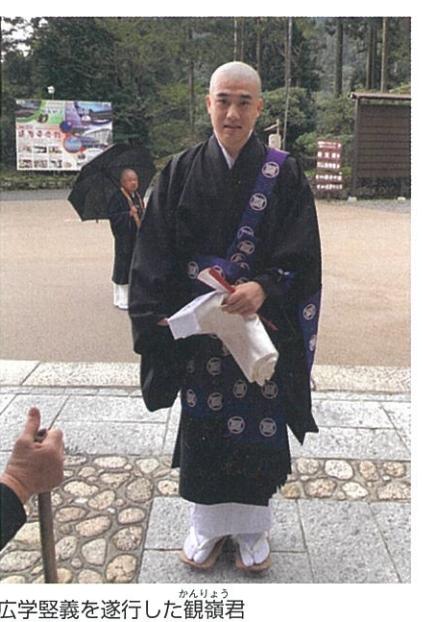
已講という最高位から最も難問に答えなければなりません。

この受験者は「堅者」といい、天台宗僧侶は生涯に一度、この大舞台に挑むことになります。



圓教寺長吏大樹孝啓大僧正を囲んで

知行院住職は延暦寺一山檀那院住職として法華十講の第二日目に出席、唄匿に次ぐ「散華」の大役を仰せつかりました。法華十講では普段あまり唱えられない「散華・中段」を「次第散華」という独特的の唱法で唱えます。住職も一ヶ月稽古に励み無事に大役を勤仕することができます。

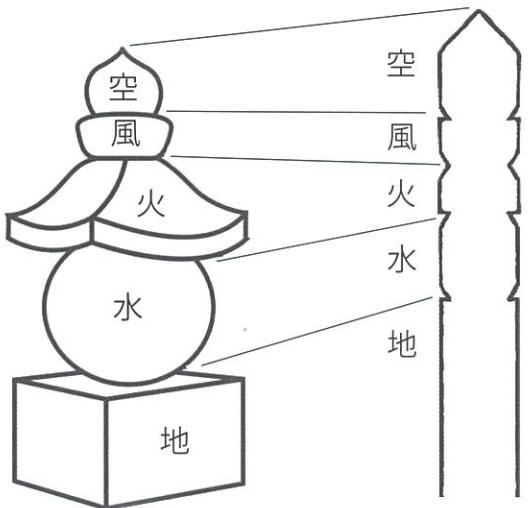


かんりょう 観嶺君
廣学堅義を遂行した観嶺君

また、住職の長男泰我君(法名・觀嶺)がこれまで第二日目の第五番堅者として、広学堅義に挑み無事遂業いたしました。觀嶺君はこの広学堅義に先立ち、九月に比叡山行院での四度修行を満行、その後、灌頂堂に於いて入壇灌頂、また戒壇院にて円頓授戒会を履修、広学堅義を含め天台宗の僧侶が履修しなければならない経歴を本年中に修め、権律師の僧階を授与され天台宗教師となりました。

偶然は重なるもので、広学堅義、第二日目の

円、宝珠の形をしています。これはそれぞれ、四角=地、円=水、三角=火、半円=風、宝珠=空を意味します。仏教では、世界は、この地水火風空の五要素でつくられていると考えられており、つまり、塔婆そのものがこの世界全体を意味しているのです。



聞かれていた

塔婆には、そういう意味もあるのですね。

住職 私たちはお墓参りをすると、とてもたおやかな気持ちになります。お参りをすることや塔婆をたてることで、その功德は必ずご先祖さまに届くものです。そして、私たちの気持ちがご先祖さまに届けば、ご先祖さまも安心して私たちを見守ってくれます。これからも、ご先祖さまを思う気持ちを大切にしていただければと思います。